

Member's Forum

活動報告の頁



U-35委員会企画 10th action
「建築と協会」活動報告
2024.04-2025.03の経過



撮影：大竹央祐

一建築と協会一 日本建築協会 事務所リニューアル工事

●10th actionに至る経緯

これまでU-35委員会で企画運営してきた、社会に向けてアウトプットするactionも今回で記念すべき10回目となりました。ここ2年ほど、8th action、9th actionを茨木市と協働し、2回にわたる社会実験を茨木市役所前線の廃道計画地で開催してきました。その経緯の中で、2x4材で組み立てるノマドギが生まれ、社会へ開いたactionの開催は、行政や地域活動団体と一緒に練り上げていくことで、企業・団体の枠を超えて、都市空間の魅力や課題を社会に広めるきっかけとしてきました。茨木市での9th actionを終え、ノマドギの次の在り方を考えていたところ、日本建築協会の事務所リニューアルの話をいただきました。2024年3月に指田会長よりU-35にリニューアル工事の話をいただき、今年度のactionとして取り組むこととなりました。

●リニューアル工事のはじまり

2004年に大阪駅前第3ビルからOMMビルに事務所移転して以降、約20年間、当時のワークプレイスのレイアウトをベースに活動が続けられてきました。この間、保管雑誌や図書類が大幅に増加し、時代の変化に応じた協会活動のためのスペースが望まれてきました。2024年度の協会の活動テーマは「トランスフォーメーション」としております、それぞれの活動領域において変革を目指していくことを期待し、20年来変えてこなかったワークプレイスを、協会にふさわしいワークプレイスを望むというご要望からはじめました。

- ・執務机：6人（+予備1）、フリーアドレスの可能性を考慮する
- ・会議室1：常任理事会ができる16人席
- ・会議室2：6人程度の小規模会議コーナー
- ・書架：書籍の見せ方、工夫など

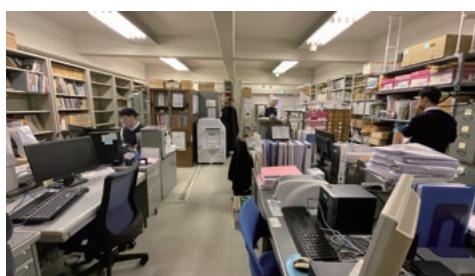
（指田会長依頼文より一部抜粋）



U-35委員会で生まれたノマドギの活動を1冊の冊子にまとめました。事務局にありますので、お手に取ってみてください。

U-35委員会インスタグラム開設しました。
活動内容やメンバーの雑感などざくばらんに情報をアップしています。

<https://www.instagram.com/u35.aaj/>



改修前



改修後 撮影：大竹央祐

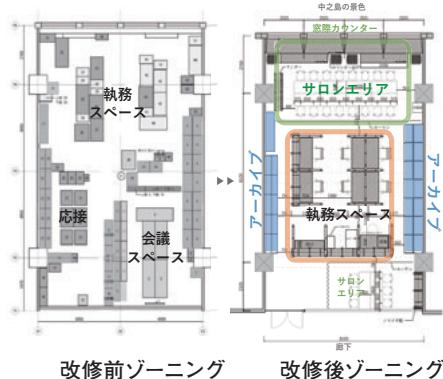
●アーカイブ性とサロン性

協会の改修にあたり、協会の特徴であるアーカイブ性とサロン性を実現するワークプレイスの在り方が、計画の軸となりました。

「サロン性」については、これまで常任理事会や各委員会での会合を会議テーブルで行ってきた活動に加え、タッチダウンオフィスとしても利用可能な協会会員が気軽に立ち寄れるワークプレイスの計画が求められました。「アーカイブ性」では、事務所の各エリアを構成する壁となっていた本棚に詰められていた膨大な書籍の整理を、理事会・事務局を中心に行われ、溜め込んでいた貴重な書物を協会会員の手に取ってみてもらいやさくなることを目指しました。こうした協会の特徴の具現化を行うことをきっかけに、サロン性とアーカイブ性の両輪により、「コミュニケーションや懇親の場としてだけではなく、自らの専門領域とは異なる会員間の交流や各種委員会活動を通じて、それぞれの持ち場での仕事の質を高めることが期待できることからその機能を強化する」という協会の活動方針に合致した場の構築となることを目標としました。

●ゾーニング計画

改修前は、執務スペースは中之島の景色がよい方にある一方で、背の高い本棚で、会議・応接とエリア分けがされており、見通しも悪い事務所となっていました。ゾーニング計画は、様々な検討の末、これまでのゾーニングから一新し、眺めのいい北側に「サロン性」を体现する会議エリアとタッチダウンスペースにもなる窓際のカウンターを配置し、両壁にあった既存の本棚を「アーカイブ性」として活かし、中央に



執務エリアを島状に配置、エントランス部に応接と小さなサロン空間をつくり、ワンルームの中に明確なエリアを再構築しました。奥のサロン空間に至るまでに、多くのアーカイブに触れる機会を設けることができ、執務エリアもこれまで通り固定席としつつも、日中には、窓際のカウンターや、大きな会議テーブルで資料を広げるスペースもできたことで、これまでになかった選択性のある働き方を実現しました。



アーカイブエリア
からサロンエリア
までのつながり
撮影：大竹央祐

●ノマドギの活用

これらのゾーニングを構成するものとして、U-35でこれまで活用してきたノマドギを執務エリアのパーテーションを中心に転用しました。茨木市や御堂筋を一時的に彩ってきたノマドギは、竹中工務店の新社員寮(深江竹友寮)で、新社員による寮祭の屋台として活躍し、最終的に日本建築協会の事務所の中央に積みあがり、新たな居場所を形成します。これまで仮設的に行き交う人たちへ、居場所を提供してきましたが、ここでは個人机のパーテーションとなるだけでなく、本棚やアーカイブの展示としても担う工夫がなされました。



パーテーションとなるノマドギ



アーカイブの展示を担うノマドギ

●建築と協会

改修にあたり、U-35のメンバーに限らず、職種を超えて、さまざまな方々のご支援ご協力の元、竣工に至りました。建築関係の各分野が集う日本建築協会だからこそできるつながりでできた改修になったと実感しています。床のタイルカーペットでは、普段の業務でお世話になっている各協力会社の方々にお声がけし、一緒に計画から施工までを行い、他にはない床のデザインができます。ノマドギを事務所にもってくるにあたり、材の塗装や搬出入は、竹中工務店の新入社員のマンパワーがあつて乗り越えることができました。また、改修の工事全般において、キドビル工務店の木戸さん・吉永さんには、週末の夜中まで施工いただき、材料や施工の方法と一緒に検討していく過程の中で、ものづくりの一端を共有し、その楽しさを肌で感じました。事務局の皆様においては、1年を通して、これからの事務所の使い方・あり方をどうするべきかといった会話や、施工時期も、一緒に体を動かし造っていただき、我々の活動へのご理解とご協力があつて実現した計画がありました。この改修を通して、サロン性の体現を目指して計画をしてきましたが、こうした施工を進めていく過程の中で、我々自身が、協会の持つサロン性に一番身を投じたように思います。同時に、これまで活動してきた中で触れてこなかった、協会の数々の貴重な図書のアーカイブに触れ、協会会員の皆様にここに来ると新しい出会いがあることを、広めたいという思いにも至りました。

最後のお披露目会では、改修にご協力いただいた皆様をお迎えし、喜びを共有しました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

(文責：河崎)



お披露目会の様子

Member's Forum

活動報告の貢

●プロジェクトの全体スケジュール

2024年の3月に依頼を受けプロジェクトがスタート、2025年3月に引き渡しを完了し、約1年をかけて設計～施工までを行いました。設計フェーズは2024年3月～2025年1月、AAFやイケフェス等のイベントも平行して進めながら、見積やコスト調整も含めて行いました。施工フェーズは2025年1月～3月の週末を中心に行いました。事務所機能を維持した改修のため、工事エリアを2つに分け、事務所スペースを盛替えながら施工を進めました。

●設計フェーズ

①グループ設計期間

4つグループに分かれ、それぞれバース・図面・見積を作成してメンバー全体で議論しました。このフェーズを経たことで、様々な視点やアイディアを集めることができ、最終案作成につなげることができました。

②とりまとめ、設計期間

理事会や事務局の意見を収集しながら、1つの案に計画を収斂させていきました。ゾーニングや設計思想の方針が確定した後は、それぞれの部位ごとに担当チームを分けて検討を進めました。

③見積・もの決め期間

施工に向けた最終調整として、見積・ものの決めを行いました。キドビル工務店さんとも打合せをしながら、最終的な材料決めやコスト調整を進めました。

●施工フェーズ

④事前準備

事務所改修にあたり、竹中工務店新社員寮でノマドギの加工を行いました。一方で事務所では不要品の廃棄などの荷物の整理を進めました。

⑤解体工事

移動書架の撤去を行いました。インパクトドリル等の音の発生する電動工具を利用した作業は夜間作業とする必要があり、夜間工事となりました。

⑥カーペット工事・床配線工事

大工工事や家具工事に先行して、床関連工事（カーペット工事・床配線工事）を行いました。施工は工事エリアを盛替えながら2回に分けて行いました。

⑦大工工事

窓際の造作、サロンのテーブル制作をキドビル工務店さんに依頼しました。窓際の家具は現地施工であったため、数日間にわたる夜間工事で仕上げていただきました。塗装はU-35メンバー+事務局で行いました。

⑧ノマドギ家具制作

ノマドギで事務机や本棚を制作しました。施工しながら現地で出たアイディアを反映し、本の展示台を制作したりするなど、ノマドギのフレキシビリティを生かしながら進めることができました。

⑨左官工事

入口の壁の内・外を左官で仕上げました。下地処理も含めて2日間の夜間工事で施工しました。

●1年の設計・施工を終えて

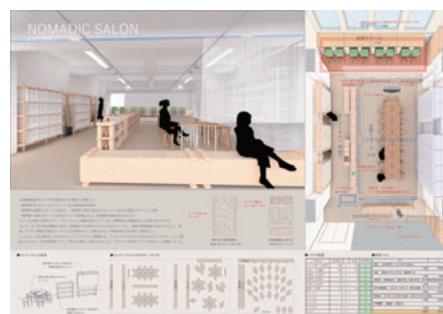
サロン性とアーカイブ性という命題に対して、所属の異なる設計者たちで集まって議論し、計画をまとめていきました。施工においては様々な関係者との協業により、工事を完了することができました。この1年間の活動を通して、日本建築協会のもつサロン性を体現することができ、また協会の様々な方々とのつながりをつくることができました。

(文責：大屋)

●グループ設計期間の各チームの提案



グループA (河崎・粉川・中野・番匠・白井)



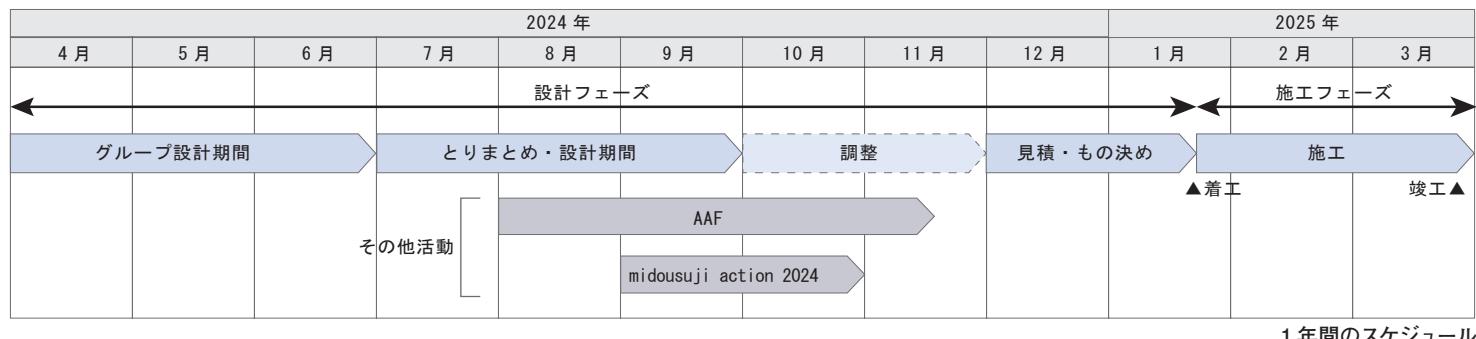
グループB (大屋・三井・洲脇・山岡・吉田)



グループC (市川・田上・林・萩尾)



グループD (倉知・南澤・円田・大西)



Member's Forum

活動報告の頁

■ノマドギの活用

(担当メンバー：大屋・三井・吉田)

社会実験で活用してきたノマドギを「事務局員の方が働くための場」として再構築するために、今回のプロジェクトでは新しいノマドギの組み方を提示しました。ノマドギは執務空間の個別ブースや本棚など、業務に必要な機能をもたせた構成で組み立てるとともに、事務所内のエリアを分割する要素としても用いています。

これまでの社会実験で使用してきた材はおよそ500本に及びます。今回は事務局内で長期の利用を想定していることから、竹中工務店の新社員寮にて有志の新社員にも多数参加いただき、材のすべてに塗装を施しました。



塗装の様子

また事務局としての機能が確保できる適切な材長にするため、そして限られた部材のなかで全体の数量を確保するために、吉永さんにお協力いただき、材のカットも行いました。

今までの社会実験では屋外での利用にも考慮しノマドギの最下段を六角ボルトで支持することで地面から浮かして組む構成としていましたが、今回の事務所計画においてはオフィスにおける機能性や可変性に配慮し、六角ボルトは設けず、最下段からノマドギを積んで組むようにしました。ノマドギを多方向で組み丸棒を通して横方向へのずれを防止するとともに、丸棒の抜き差しにより使いながら自由に組み方を変えていけるような構成となっています。



ノマドギ検討パース

社会実験で活用してきたノマドギを事務所で再構築するにあたり、ノマドギの可変性を活かしたままワークプレイスを創ることに注力しました。



U-35メンバーによるノマドギの組み立て

ノマドギを利用しているからこそ、事務局の方が使いながら組み方を変えていける、可変し続けるオフィスを実現することができたと感じています。
(文責：三井)

■タイルカーペット改修

(担当メンバー：河崎・粉川・中野・番匠・白井)

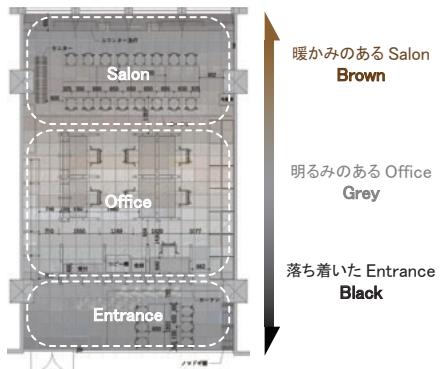
協会事務所の床を改修するにあたり、“サロン性” “アーカイブ性”、そして日本建築協会事務所の特性である“建設業をはじめ建築関係各分野から参加のある協会”だからこそできる改修は何かと考え、企業の枠を超えて合わさる1つの作品として、メーカーの皆さんにご協力を仰ぎ収集した廃番タイルカーペットサンプルでデザインする計画としました。メーカー5社（川島セルコン・サンゲツ・スマノエ・田島ルーフィング・東リ）との合同ミーティングを行い、各メーカーが持ち寄ったサンプルの中から起用する色・柄の選定を行い、デザインの方針を決定しました。



タイルカーペットメーカー5社合同打合せの様子

暖かみのある窓際のサロンスペースはBrown（茶）、事務所の方々が働く明るみの

あるオフィススペースはGrey（グレー）、受付でもある落ち着いたエントランスはBlack（黒）と、1つ1つ表情の違うタイルカーペットをグラデーションになるようカラーチャートを作成しました。床の色によって空間を分けつつ、グラデーションにより空間につながりを持たせました。



また、協力メーカーを招待したタイルカーペットワークショップを開催する事で、コミュニティを広げながら、実際に自分の手で施工することができました。



糊をローラーで塗る様子



ワークショップでタイルカーペットを貼る様子

今回業種の壁を超えて改修を行えた事は、私自身タイルカーペットの施工を初めて行ったということも含め、大変貴重な体験であり、メーカーの方々との新たなつながり、そして今後の関係性を構築できたとても良い機会になったと感じました。
(文責：番匠)



タイルカーペットワークショップday1、day2のご参加の皆さんとの集合写真

Member's Forum

活動報告の頁

■「協会」の空間を目指して

事務所改修のプロジェクトを通して、U-35委員会では多くの工程を分担・協力しながら取り組んできました。様々な人たちに関わって頂いた中で、「協働」を一つの軸として場づくりを考えてきた結果が空間に現れている気がします。一見チグハグな組合せや、美しいとは言えない姿のものも「協会」とは何かについて関係者皆が場づくりを通して考えてきた結果によるものです。「協会」という空間を目指し、形而下と形而上を繋ぐデザインとして考えてきた事について、この見開きページでは各工事の報告とともに主なポイントをご紹介します。

—サロン空間—

受付・アーカイブ棚を通り事務所の奥に構えるのが会員の交流拠点となるサロン空間です。日中は事務局の執務作業や息抜きの場として、会員にとってはタッチダウンオフィスとして利用可能です。夕方以降は各委員会の打合せ拠点として活用できる他、レイアウトを変えることでイベント利用など非日常的な使い方もできる空間としています。小さなオフィスでありながら様々な重ね使いにより、多様な協会内外の情報が出会うスペースとして計画しました。

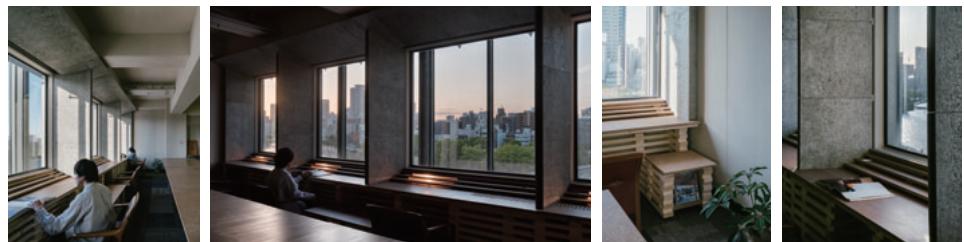
メインで手を加えたのは窓際のカウンター、可動・分割可能な大小2つの会議テーブル、移動可能なモニター台、サロンに面した執務ブース背面のアーカイブ棚です。各造作には収納や展示棚を設けることでサロン空間をアーカイブ情報で囲み、また収納量を代替させることで、東西面の既存アーカイブ棚で書籍表紙を表に向ける等の展示機能の向上を考えました。

・都市風景を見つめなおす窓際カウンター

20年来の活動の舞台である大阪の都市風景を改めて見つめなおす。協会事務所のリニューアルを機に、これまで見てきた都市風景が新鮮にも映るような、インテリアと都市の関係を繋ぎなおす窓回りを考えました。既存ペリメーターカバーや空調設備、見付が大きかったカーテンウォールを覆うように、ノマドギー的“積み重ね”的意匠を引継ぎながら卓上ラック・天板・ベンチ兼本棚を一体化し



サロン空間 撮影：大竹央祐



窓際カウンター 撮影：大竹央祐

たカウンターを設えました。

窓は北向きで、目の前が川で開けている立地の特性上、朝・夕の自然光が強く差し込む空間でした。風景を印象的に見せることと、この太陽光との関係を踏まえ、抱きが深くテーパーの効いた額縁をカウンターと一体で作っています。都市や川を経由する間接光や直接光が柔らかくインテリアの奥まで届くことで、サロン空間や平面中央の執務ゾーンとの都市の関係を強化できればと考えました。朝は執務開始時間に、夕方は執務が終わり各種委員会が始まる時間に、このブリーズソレイユ的な額縁が捉える光が時間の切替を演じ、協会オフィスとして空間にリズムを作ることを考えています。

個別ブースとして使う際は、額縁の抱きの深さにより隣が気にならないバッファーとして、集団で会議やイベントを行う際は印象的なプロセニアムとして機能します。カウンターは段状構成のため複数レベルの面があり、存置要望の既存ソファチェアに対応するロー

テーブル兼アーカイブ棚、イベント時の段床、間接照明や卓上コンセント配線カバー、隙間の書類収納スペースなど、個人～集団の幅広い使い方に応えるカウンターとしています。

素材は額縁を木毛セメント板（セメント+木片）、卓上ラック・天板はパーティクルボード（木片の塊）、脚組はツーバイ材のノマドギー（無垢木材）で構成しています。十字梁が特徴的なコンクリート造の既存直天井から、インテリアの中心であるノマドギー家具へと、素材の組成においてグラデーション的な関係を持たせ、既存空間と改修空間を繋ぐものとして考えています。工法においても、協働のきっかけを作るべく、工務店工事とDIYの合番工事としました。

既存空間と改修部、インテリア全体と都市空間、様々な協働プロセス、日常と非日常、日中と時間外、個人と全体、アーカイブ性とサロン性など、このプロジェクトにおける諸条件を取り結ぶ存在として、これからの協会活動を支える背景になればと考えています。

—協働の軌跡—**・協働①：メーカー**

前述のタイルカーペットに加え、南側正面壁面については株式会社フッコ様より材料の無償提供と施工方法の詳細なアドバイスをして頂きDIYによる左官壁を実現しています。材料攪拌、下地補修、シーラー塗布、下塗り、仕上塗り、骨材投げつけ、ノマドギによる型押しという工程を経て完成しましたが、今回検討したのがDIY用材料では無いことや、厚みの薄い基材に骨材を混ぜた特注仕様であること、且つ、その上に型押しするという特殊な仕上ということもあり、各工程において施工要領書の向こう側にある感覚を詳細に教えて頂きました。また、実際に施工する中でチームワークや時間配分等のコミュニケーションも出来栄えに反映されるものなのだと重要性を感じたところです。単に商品を購入して設置するような消費の感覚とは異なる、ものづくりの奥深さに触れることができたように思います。(fig.1)

・協働②：工務店

解体、配線盛替え、大小の会議テーブルや窓際カウンター等、DIYでは難しい部分の施工や加工の多くを工務店さんにお願いし実現しました。(fig.2) 特に窓際カウンターと一緒に額縁については、斜めの取合いが多いことや既存躯体の不陸を読み取りながらの施工等、難しい部分が多くても拘わらず、改修したとは思えない程、既存部分と一体化した精度の高い仕上がりとして頂きました。

特に印象に残っている事の1つは、建物の内装基準の関係で、額縁下地の躯体固定可能箇所が非常に限られていたところ、大工さんの感覚を信頼し、取りつく木毛板の重さを確認しながら最善の下地配置を調整されていました。メーカーが推奨する基本的な下地配置が困難な条件下で、物理的・人間的な判



fig.1 左官協働作業



fig.2 右側に吉永さんとキドビル工務店木戸さん

断により可能となった工事だと思います。

また、図面やり取りの渦中では、角度の付いた額縁やコンタのように積層するカウンターなど、複雑な表現に隠れている意図を瞬時かつ正確に読み解いて対応頂いていたことも印象的で、設計図・加工図が持つ手紙的な意味合いをより強く感じる一面でした。

普段業務で扱うようなマスのものづくりの中では忘れがちな、人間と物との関係を改めて考えさせる重要な学びを得たと思います。

・協働③：運用者

ノマドギの組立を皮切りに、左官や塗装の他全般に渡って事務局の皆様も共に施工を行って頂きました。施工をご一緒する中で、特にノマドギの組立については原理を会得され、運用開始後も必要に応じて余った材料を使い執務デスク廻りのアレンジや衝立の新設等、運用者自ら空間を調整されています。(fig.3) ノマドギの手軽さ故の一面であると思うとともに、協働によりものづくりのプロセスを共にしてきた一つの成果のように感じています。

・協働④：設計者

設計の協働としてU-35内の協働についても触れておきたいと思います。特にノマドギに関しては、これまで複数回の社会実験を通じて連絡と設計協働作業が続いており、敷地の条件や要望に応じて新しいアイデアが積み重なっています。今回は、窓際カウンターの脚組を始め、「ノマドギ+α」のアイデアが随所に活かされています。(fig.4) これまでの社会実験で使用してきた材料を転用しているため、木材の経年変化の表情自体がU-35の活動の証となり、アーカイブ性の一つの要素にもなっています。設計者の協働によるアイデアや創作意欲が溢れる空間であるとともに、協会内の活動プロセスも感じられる空間になったのではと思います。

—協会の空間—

ここまでメーカー・工務店・運用者・設計者の協働のプロセスをご報告しました。インテリア空間が床・壁・天井・家具の要素の集合によりできるものだとすると、今回のプロジェクトでは各要素をつくるプロセスで「協働」が1つの共通項となり空間に結実しているのではと振り返っています。

協会の活動は、協会内外の活動を企画・話し合い、事務局の編集・準備作業を通して書籍やイベントとしてアウトプットされ、その情報をきっかけとして交流が生まれ、更なる企画へとスパイラルアップする構造がベースにあると思います。今回の改修では、協会における、建築に関わる活動や様々な立場を跨ぐ循環が改めて描かれたプロジェクトだったと言えるかもしれません。

考えること・つくること・使うことが分離しつつある時代において、ここで述べてきたような協働のプロセスにより健全な循環が再興しつつあるように感じています。協会の意義を考え直し取り組んできた結果、新事務所は今の時代に新鮮かつ懐かしいメッセージ性のある場になったのではと思います。

(文責：倉知)



fig.4 ノマドギ+αのアイデア

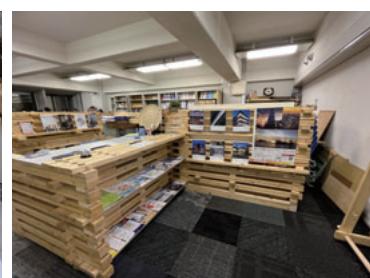


fig.3 運用者作成の衝立 (受付右) とハンガーラック・目隠しルーバー

Member's Forum

活動報告の頁

■座談会vol.1

10th actionの座談会は、1年間の改修を通して、指田会長・中村未来創生プロジェクト委員長・柏原事務局長とU-35メンバー数名で、それぞれの立場からみた協会改修を振り返ります。

●サロン性とアーカイブ性について

河崎 最初に、お題としてあげられたサロン性とアーカイブ性について、改修ではゾーニングの形を主体として応えてきました。この言葉自体、いつ頃出てきたものでしょうか。

中村 第3ビルに事務所があった頃から、会員数の減少という課題もあり、会員間の交流を促す、だれもが気軽に集える場所をつくってはどうかという話はありました。ここへきて、リアルな対話が重要という機運もあり、サロン性が求められていることと協会のリニューアルの時期がマッチしたんですね。

指田 サロン性とアーカイブ性という言葉自体は、『建築と社会』22年4月号に、「協会のこれから」を特集した時に、初めて表に出たと思います。長年議論したこのキーワード「サロン性」をきっかけにして、やはり会員の集う場所が欲しいという話に行き着いて、20年来変えてこなかったワークプレイスそのものをリニューアルしようということになりました。



指田会長

●ノマドギの活用とゾーニングについて

指田 最初に4案が出てきた時にノマドギの絵を見て、なるほどと思いました。4案とも独自の視点に立った個性的な案でしたが、広く使いたい想いもある一方で、音の問題から仕切りたいという要望もありました。いろいろと事務局からニーズを聞き出す中で、当初の4案のそれぞれの良さを、U-35のメンバーで上手くまとめてくれたなと思います。

河崎 仕切りの話は、結構ギリギリまで悩ん



だところでした。ご要望もあって、カーテンでも仕切るのは難しいなと思いながら進めてきましたが、スプリンクラーの話もあって、最後は取りやめました。できあがるとオープンな空間で広がりがあって、いい場所になったと思っていますが、局長、いかがでしょうか。
柏原 もう少し経験を積まないとわからないですが、同時に委員会を2つやってみた実感でいうと、参加する方が少し意識すれば、このままでもいけそうな気がしています。

●改修のプロセスについて

倉知 お聞きしたかったのですが、一緒につくることを通して、例えばカーテンはなくてもいいかなとか、当初のお気持ちが変わらような事がありましたか？事務局の皆さんも共に施工をして頂いた中で、何か感じたことがあれば教えてください。

柏原 カーテンについては、工事費用がだんだん膨らんできたので、出来上がってからまた考えようと思ったのが実際のところです。

一同 笑。



柏原事務局長

柏原 できあがってみないとわからないこともあるので、まずは空間を作るところまでやりきってみるという思いになりましたね。

中村 この改修は、アジャイル的なところがありますよね。

指田 そうですね、一旦つくったものを使ってみてフィードバックして、改善していくのがいいですね。

中村 ノマドギはそれができるシステムですよね。

河崎 材料などは、まさにそうでしたね。できたものと図面で当初描いていたものは全部違う結果になっています。木戸さんと話す中で、この予算に抑えるならこれやったらどうかな？とその場で決まったところも多かったです。

倉知 この改修を通して、つくっていくうちに、何か人の考え方が当初の考えから変化して行くのかなと想像することが多くありました。局長は設計の初期段階では強いご要望を持たれていた印象がありましたが、最終的には、何でも屋さんのようにあらゆる部分の施工をご一緒に頂いていました。協力して共に作る中で、何かを感じたのではないかと思ったのですが、、やはりお金のことでしたか(笑)。

柏原 コストは気になったところですが、最初は本当にできるのかなと不安に思っていました。実は昔の会議机も、そのまま産廃にするとコストがかかるところを、協会の中に引き取り手がいたり、多くの方々に協力して頂きました。壁の左官材料もメーカーさんとの繋がりで調達できたりなど、設計の人も現場の人もいて、図面も引けるし色々な工具の使い方も皆さん習熟していて、協会だからでき

たリニューアルだと感じていますね。

●協会らしさについて

中村 ここに集まっている人は皆、企業に属してますよね。そんな組織系の集団の強みのひとつは、みんなでワイワイやろうぜという機運が生まれやすいことだと思います。プロセスを楽しむ空気ができると、そこが協会の強みでもあると感じます。



中村文紀／未来創生プロジェクト委員長

大屋 そうですね、事務局との関係もお客様と設計者というやり取りで始まりましたが、気がつけば最後は一緒につくっていて、だんだんと同化していきましたよね。

河崎 最初あんなに一緒にやってくれると思ってなかったのに、いつもいてくれていて。
大屋 キドビル工務店さんもそうで、工務店さんにお願いするということで最初は身構えてたんですけど、あの2人のキャラクターもあって、だんだん一緒にくるっていう方向にシフトしていったと感じています。



大屋泰輝／U-35委員会

河崎 協会らしさに向かう分岐点みたいなところはあって、タイルカーペットも普段は絶対にやらない複数メーカーを混ぜて貼るという計画も、1社にお願いしてデザインとしてまとめる選択肢ももちろんあった中で、今回はそうではなくて、別のやり方もできるんじゃないかなっていうところで協会らしさを求めて進みましたね。

中村 まさにそこが面白いところですね。

河崎 U-35が主体でやってたので、いい意味で若者に力になってあげようっていう目もありましたし、それこそ同世代のつながりで

集まった力もあって、立場のラインがなく会話できていた気がします。



河崎菜摘／U-35委員会

柏原 メーカーさんから、設計事務所の幹部の人の話よりも、実際手を動かして図面を描いてる若い人といろんなお話ができたり、どんな考え方をしてるのかとか、そういうことが吸収できてよかったという話を聞きました。

指田 そこが重要なところですね。

中村 この先設計者としてメーカーさんと対峙した時、少し彩りが違ったやり取りができるんですね。

●活動の源はなにか

柏原 皆さん、楽しかったですか。

倉知 楽しいというよりも、なぜかやってしまっているというのが正直なところですね(笑)。

大屋 なんでこんなことやってるんやろ?と感じることはよくあります。

河崎 今回の改修だけではなくて、他の社会実験等の活動でも毎回そうなりますよね(笑)。

中村 協会活動っていつも楽しいとか有意義だと思っている訳でも無いところが面白いところですね。たまにぶつぶつ言いながらもやるか、忙しいからと言ってやらないのか。そのなぜかやってしまうというパワーで協会の活動が成り立っていますよね。

倉知 なぜかやってしまう人たちが集まるのが協会である、といった証として協会が認識されると面白いですね。楽しいだけではないけど、責任感や協力精神を持った人たちの集まりであるという価値があると思います。

大屋 普段の業務とは少し毛色の違うことを社会実験等で実践してますし、設計者として社会に何かアクションを起こしてみたいという思いはあります。活動していく中で、得られる気づきはたくさんありますね。

河崎 他社の設計者とアウトプットを考える

機会ってとても大事だと思ってますが、今回は特に違いも含め感じましたね。倉知君の窓枠に対するこだわりとか、それをどう伝えていくかといったスタンスやバランスの取り方を見られたのも面白かったです。

●DIYでやることの意義

倉知 今回は、DIYの価値を改めて見直す機会になったと思っています。つくることがそもそも持っている協力行為や、人間の繋がりを前提としたモノづくりの状況などを引き出す良さがあるなど。日曜大工として個人で作る事と異なり、皆が集まって協業することでより実感しました。今回の「協会」というテーマにも大きく関わっていますね。ノマドギをDIYで作れるようにしている意義や、設計者自らが施工すること、工務店さんとDIYの合番を敢えてしていることなど、つくるプロセスを通じた交流を大切にしてきた結果がこの空間に現れていると感じています。サロン性もアーカイブ性も、こうしたプロセスを経たことでより感じられる気がします。いわゆる美しい空間ではなく、「協会」の意味を感じられる空間だと思います。



倉知寛之／U-35委員会

●座談会を終えて

今回の座談会をvol.1としているのは、改修にご協力いただいた方々を今後もお招きして、座談会を第2弾、3弾と開催し、改修後の使われ方や経過と共に、お伝えしていきたいと思ってのことです。

1年間の改修で、サロン性とアーカイブ性が協会の軸となっていく土台を、たくさんの関係者の皆様とつくりました。ここで終わりではなく、運用を通じて更に広く協会活動の基盤として成長できるよう、今後もU-35の活動の中で考えていきたいと思います。

(文責：河崎)